

私をつくったもの

2020. 1. 21

私の読書人生のスタートは、「巖窟王」である。この本は、アレクサンドル・デュマ・ペールの小説「モンテ・クリスト伯」の日本版である。小学生の時に本屋さんに行って母親に買ってもらった本である。数時間で一気に読んでしまった記憶がある。読み終わったときには部屋が暗くなっていた。明かりもつけずに夢中で読んでいた。

この「巖窟王」に出会って以来、本というものに興味をもつようになった。兄の部屋に「国盗り物語」という分厚い本があった。あまりにも厚いので読めるのかどうかわからなかったが、とりあえず読み始めたところやめられなくなり、これも一気に読んでしまった。作者は、司馬遼太郎という人だった。この人が有名な作家であることは後で知った。

中学生になり、私はソフトテニス部に入った。冬になると雪が積もりテニスコートが使えなくなる。部活は走るだけとなった。帰宅時間も早くなった。かといって勉強をするわけでもなく、することがなかった。おかげで自然と本を読むようになった。

だが、如何せん中学生はお金がない。仕方なく何百円で買える文庫本に手を出すようになった。それもあまり厚くないものに。私にうってつけの本があった。それが、星新一のショートショートというジャンルのものである。小説の中でも特に短い。なおかつ不思議かつ意外な展開と結末が待っている。一冊にいくつかの話が収録されている。だから、短い時間で一つの話を読み終えることができた。

私の習性なのだが、一つ二つと手に入れると、すべてそろえたいくなる。結局、星新一のショートショートはすべて読んだ。加えてそれ以外のエッセーなどもすべて読んだ。気がつくと、文庫版の星新一を制覇していた。

私にとっての次なるターゲットは、かの夏目漱石だった。あの当時、文豪夏目漱石は私にとって読まなければならないという位置づけだった。前期三部作の「三四郎」「それから」「門」を読んだ。「吾輩は猫である」や「坊ちゃん」という代表作に浸ったのはその後だった。仕上げは後期三部作だった。「彼岸過迄」「行人」「こころ」である。結局文庫版夏目漱石も制覇してしまった。私にとってのナンバーワンは迷わず「こころ」である。この作品には時代を超えた魅力がある。夏目漱石はすごいのである。

夏目漱石によって小説への目を開かせてもらった私は、その後も有名な作家の作品を次から次へと読んでいった。おかげで私の部屋の本棚は文庫本だらけになってしまった。中学1年生までは冬期限定の読書だったが、2年生になると春から秋までのテニスシーズン中も本を読むようになってしまった。当然のごとく勉強はしない。だが、それでよかったと思っている。各教科の勉強に勝るとも劣らない大切なものを読書から得ることができた。今の自分を形作ったと言っても決して言い過ぎではない。